

明日への架け橋 若手技術者!

インフラ維持・整備に取り組む地方公共団体や建設会社の若手技術者にインタビュー。現場からの生の声を、建設関係者やこれから建設業を目指す若者に向けてお届けします。

Vol.16

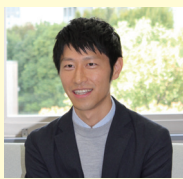
株式会社日建設計総合研究所
主任研究員

松縄暢さん Mitsuru Matsunawa

持続可能な都市づくりを目指して

まちと向き合い考える

若手コンサルタント



● PROFILE ●

まつなわ みつる
松縄 暢

新潟県燕市出身。早稲田大学創造理工学部建築学科卒業後、東京大学公共政策大学院を修了。株式会社日建設計総合研究所に入社し、渋谷未来デザイン設立支援、立地適正化計画策定支援、「Walkability Index」の研究開発など、多岐にわたるプロジェクトに携わる。趣味はまち歩き。

今回紹介するのは、株式会社日建設計総合研究所（NSR）でコンサルタントとして都市やまちづくりの課題解決に取り組む松縄暢さんです。持続可能な建築・まちづくりの実現を目指し、建築から都市のライフスタイル全般まで幅広い領域で、調査・企画・コンサルティングに携わっています。

飛行機から見たアメリカと日本の街並みの違いに興味を抱いたことを出発点に、大学では建築、大学院では経済を学び、二つの専門性を掛け合わせて都市を読み解く視点を培ってきました。「自分だったらどんな人にまちづくりを任せたいか」を常に意識しながら、当事者としてまちを見る姿勢を大切に、実務や研究に取り組んでいます。

若手のうちから多くのプロジェクトに関わり、苦労を重ねながらも信頼を築き、多方面で活躍できる存在へと成長してきた松縄さん。A+が加速する時代において、専門家としてどう価値を発揮し続けるのか、そのヒントや展望について伺いました。

**建築と経済の学びを武器に
若手期から多様なプロジェクトへ**

——まちづくりや都市計画に興味を持ったきっかけを教えてください。

中学生の時に、アメリカで2週間のホームステイを経験しました。その際、飛行機の上から見たアメリカのまちの形が、日本とは明らかに違って見えたことがとても印象的で、不思議に感じました。この体験が、建築やまちづくりに興味を持つきっかけになりました。

——大学では建築、大学院では経済を専攻していますが、専攻を変えて経済学を学ぼうと思った理由は何ですか。

大学では建築設計についてはしっかりと学べた一方で、行政の都市計画や国の都市政策については深く学ぶ機会が多くありませんでした。後に、その領域は、東京大学が強く、また、文系の方も多く携わっていることを知りました。そこで、経済学の視点から都市計画をどのように分析できるのかを学びたいと思いました。同じまちづくりや都市計画でも、異なる視点を持つことで、より広い視野を得られたと感じています。

——コンサルタント業界を選んだ理由を教えてください。

コンサルタントはエリアやクライアントを問わず仕事ができ、地域ごとにまちづくりのフェーズが異なります。上位計画を立てる段階から、その計画に沿った具体的な施策の検討、さらに実行まで、全てのプロセスに関われる点が魅力です。幅広い業務に携われることに、強みと面白さを感じています。

——NSRで働く中で感じる、組織の強みや特徴を教えてください。

当社は、現在、都市系の専門家と環境・エネルギー系の専門家で構成する7つのビジネスドメインを軸に活動しています。会社規模自体は大きくないものの、全研究員が建築・都市・環境分野における何らかの専門家であり、そうした方々と柔軟に連携しながら働けるネットワークの強さは、大きな魅力だと感じています。

また、世界的な設計会社である日建設を中心とした、日建グループ各社で連携して取り組む機会も多くあります。プロジェクトごとにメンバーが変わるため、日々新たな気づきがあり、学びの連続です。

——入社前のイメージと、入社後の実際の業務でギャップを感じた点がありますか。

少人数の会社のため、若手のうちから何でも任せてもらえる環境でした。入社1年目は「渋谷未来デザイン」という法人を設立するプロジェクトに携わり、



組織構成から予算までゼロベースで検討する機会を得るなど、多くの経験を積むことができました。幅広い分野の仕事がある中でも「全部経験できたのでは？」と思うほど挑戦の機会を与えてもらえる会社です。「いろいろやりたい！」と言い続けていた自分にとって、良い意味で期待を大きく超えていました。

**当事者としてまちを見る力
気づきと観察から生まれる提案力**

——コンサルタント業務は、クライアントの課題を解決するためのアイデアや提案力が求められると思いますが、日頃から意識していることはありますか。

常にアンテナを張ることは意識しています。ただ、国や民間の新しい取り組みを支援する機会が多いため、「ヒント」や「やってみよう」という情報は情報として



留学中の奥様に同行し、約1年間「海外リモートワーク制度」を活用してイギリス・ケンブリッジに滞在。時間がゆったりと流れるまちの魅力を肌で感じ、「将来はここに住みたい」と思える場所になったという。

自然と大量に入ってきます。新しい取り組みに関わる機会が多いからこそ、これまでの蓄積や過去の知見は大事ですが、同時に新しいトレンドにどれだけ早く追いつけるかも重要だと思っています。

——コンサルタントとして業務を進めるうえで、特に気をつけていることは何ですか。

コンサルタントはあくまで外部の立場であり、第三者だからこそ言えることがあります。一方で、まちづくりは地元のプレーヤーがいなければ成立しないものなので、そうした方々の思いをきちんと拾って、生かしていくべきだと思っています。客観的なデータを示しつつも、主観的な要素を組み合わせなければ前に進まないで、そのバランスには気をつけています。

——多様な関係者と連携する場面が多いと思いますが、特にまちづくりにおいてコミュニケーションで心がけていることはありますか。

「自分も当事者の1人だ」という意識を持つようになっています。まち歩きが好きというところもありますが、実際に現地へ足を運ばないと分からないことは本当に多いです。「ここに住んだらどう感じるだろう」「こういう施設があれば意外と便利だな」といった感覚は、暮らしに寄り添った計画をつくるうえで欠かせません。現地で生活する人たちにとって、当事者意識を持たずに机上で計画をつくる人には任せたくないはずですし、私自身もそう思います。だからこそ、できる限りの想像力を働かせながら、その地域で暮らす視点を大事にしています。

——これまで訪れたまちの中で、住みやすいと感じた場所があれば教えてください。

イギリスのケンブリッジに約1年間住んだことがあり、まち全体が美しく整っていて、とても活気がある点が気に入っていました。大学施設を中心とした中世

から続く街並みが美しいだけでなく、公園や広場が豊富で、各種施設も充実しており、生活に必要なすべての機能が中心部にコンパクトにまとまっています。歩いているだけで楽しいまちで、妻とも「将来ここに住みたいね」と話したほどです。

暮らしやすさの観点から徒歩圏内の施設充実度を評価する指数

ワーカビリティ インデックス
Walkability Index

「Walkability Index」は、都市における「徒歩での暮らしやすさ」を数値化した評価指標です。ある地点から徒歩で到達できる範囲に、生活便利施設や商業・レジャー施設、教育・学び施設などの都市のアメニティ（近くにある嬉しい施設）がどれだけ集積しているかを、都市データを基に100点満点で評価します。

主な特長

① 徒歩で到達できる都市のアメニティを集計

詳細な歩行経路データから徒歩圏を設定しているため、直線距離を用いた場合よりも正確に実態を把握できる。

② 任意の地点ごとにピンポイントにスコア化

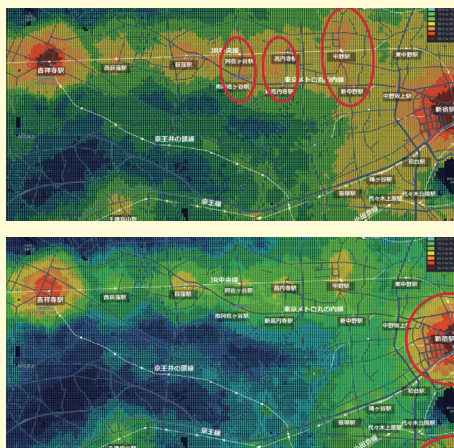
50m四方のエリア（一街区相当）ごとにスコアを算出しているため、同じ駅周辺でも場所による差を可視化できる。

③ 「住宅」と「オフィス」で異なる評価が可能

利用者の属性に応じてアメニティの種類を選択できるため、バラエティーに富んだ評価ができる。



レーダーチャートで表示することで、個々の地点の特徴を分かりやすく可視化し、複数地点を比較することができる。



住宅を基準としたヒートマップ（上）と、オフィスを基準としたヒートマップ（下）。ヒートマップを表示することで、エリア間のスコアの差を、地図上で分かりやすく可視化することが可能。

**Walkability Indexでまちを読み解く
研究成果が実務を変える**

——御社はシンクタンクとして研究にも力を入れていますが、松縄さんが取り組まれた研究について教えてください。

入社2年目に、上司と2人で「Walkability Index」

の研究プロジェクトを立ち上げました。データの活用によって「歩いて暮らせるまち」を客観的・定量的に評価し、まちづくりや都市計画をどのように効率化・高度化できるのかを主に研究しています。

国も「コンパクト・プラス・ネットワーク」を掲げ、コンパクトシティを推奨しています。住宅や都市機能を集積させることで人々の生活利便性やまちの持続可能性の向上を図るものですが、居住地の選択は個人の自由であり、強制されるべきものではありません。だからこそ、人々の居住地選択のための根拠として、各エリアの魅力を観客的なデータで示す必要があります。

そのためのツールの一つとして「Walkability index」を導入することで、他のまちとの比較が可能になり、現状の良い点や改善点を把握しやすくなります。これまで存在しなかった判断材料を提供することで、各まちが持つ個性をどう伸ばしていくか、その検討に役立てていただけると考えています。

——研究は成果が出るまで時間を要することも多いと思いますが、どのようにモチベーションを維持してきているのでしょうか。

当初はクライアントもない、ゼロからのスタートでした。実際にプロジェクトとして軌道に乗るまでにはかなり時間がかかりましたが、会社のリソースを自由に活用しながら、自分がやりたい研究に取り組みることが純粋に楽しく、つまずきやマイナスに感じたことはほとんどありませんでした。

——御社が掲げる「持続可能な社会の構築」に向けて、松縄さんが特に大切にしている視点や取り組みがあれば教えてください。

持続可能な社会づくりにはさまざまなアプローチがありますが、私が特に意識しているのは、「持続可

能」という言葉の持つやや消極的なイメージを、いかに前向きな方向へ転換していくかという視点です。現在は、財政面も含め、「持続不可能な状態をどうゼロに戻すか」という維持管理面の課題が議論の中心になりがちですが、「地域をどうプラスに伸ばしていきたいか」まで踏み込むことが重要だと考えています。

その起点となるのが、地域の魅力や個性を「見える化」し、それをどのように伸ばしていくかというアプローチです。会社としては、サステナブルな方向へ進むことを大事にしつつ、その過程を「どう楽しく進めていくか」という点も忘れずに取り組んでいきたいと思っています。

AI時代だからこそ問われる 人としての強みを活かすキャリア

——コンサルタント業界の将来について、どのような展望をお持ちですか。

生成AIの登場により、外部に依頼せず社内ですべてできるケースが増えたり、これまで数百人が必要だった作業がわずか1人でできるようになったりと、市場全体として縮小傾向は、今後避けられないと感じます。ただ、その中で淘汰されないためには、専門性をしっかり身につけること、そして「個人として声をかけてもらえる存在」になることが重要だと肝に銘じています。

——AIが普及する時代において、「自分の言葉で伝えること」の価値をどのように捉えていますか。

客観的な事実と主観的な価値判断を切り分けて考える必要があると思います。同じ資料でも、話し方や伝え方が違えば、相手の受け取り方や行動も変わります。事実に対して自分の思いや考えをどう重ねて伝えるか

が、人を説得し、動いてもらうために重要だと思っています。当然、生成AIと目の前の人間とでは説得力が変わってくるはずですよ。

そうした「フィルタ」としての価値がコンサルタントに求められており、その部分は確実に守っていかなければならないと考えています。

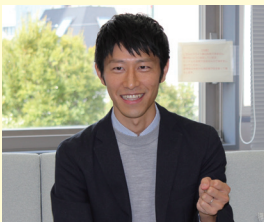
——次世代を担う若手技術者にメッセージをお願いします。

後輩にはよく「仕事は楽しもう」と伝えていますが、仕事は楽しんだ方が絶対に良いですし、「何のために生きているか」を考えたときに、仕事は人生の3分の1、場合によっては2分の1を占めることもあります。それがつまらなければ、人生もつまらなくなるはずですよ。

同じ仕事をしている人でも、楽しそうに働いている人と一緒に仕事をしたいと思うでしょうし、そういう人には自然と声がかかると思います。つらい時でも「楽しもうとする気持ち」は大切で、やりたいことは後から必ずできるフェーズが来るはずですよ。そんな思いを持って働けると良いのではないのでしょうか。

(取材日：2025年10月)

● 取材後記 ●



コンサルタントという立場の難しさを理解しながらも、データだけに頼らず、自らまちを歩き、住む人の感覚に寄り添いながら仕事に向き合う姿勢が印象的でした。中でも「仕事は楽しもう」という言葉が心に残り、生成AIが進展する中においても、楽しむ姿勢こそが人を動かし、まちを動かす力になるのだと感じました。